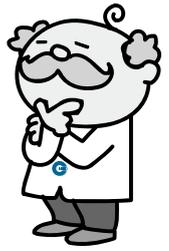


こんにちは!

村立東海病院です



「看護の日」～看護の心をみんなの心に～



毎年5月12日は「看護の日」——近代看護の基礎を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなんで制定されました。また、「看護の日」を含む1週間を「看護週間」として、全国でさまざまな催しが行われています。

当院でも5月14日に、「看護の日」にちなんだイベントを開催しました。白衣体験や血管年齢測定のほか、射的等の催しもあり、たくさんの方々にご来場いただきました。今回は、当院で働く看護師の「忘れられない看護エピソード」をご紹介します。



私の原動力

手術・中材室師長 清水 千恵美

今から40年前、大好きだった祖母が脳出血で倒れました。1か月近く昏睡状態が続きましたが、幸い意識が戻り、問いかけにうなずくことができるまでに回復しました。しかし、医師からは「これ以上の回復は見込めない」との説明がありました。祖母が病院嫌いなことを知っていた父は、「それなら早く家の布団に寝かせてあげたい」と、祖母を帰宅させました。それからわが家では、祖母の介護生活が始まりました。

兼業農家で、長男の嫁だった母は、必然的に祖母の介護をすることになりました。農作業と家事、祖母の介護は、毎日休むことなく夜中まで続きました。母は、いつも祖母に笑顔で話しかけ、怒ったりすることは一度もありませんでした。専門的な知識や技術のない母が、9年もの間、在宅介護を続けられたのは、母の人間性や祖母への思いやりの気持ちが深かったからだと思います。今とは違って社会資源も十分に整備されていない中での在宅介護は、苦労の連続だったと思います。

私はそんな環境の中で育ち、祖母の介護を通して、自然に自分も人の役に立つ仕事がしたいと思うようになりました。そして、専門的な知識があれば、もっと祖母と母のような患者さんや家族の手助けができると思い、看護師の道へ進みました。

看護師になって31年。私が看護師として前進する原動力は、いつもそこにあります。そしてこの前進はこれからも続いていきます。

最期のとき

村立東海病院 看護師

私が看護学生のころ、いろいろな診療科へ実習に行き、多くのことを学びました。

特に印象的だったのは内科実習。余命わずかの終末期の患者さんに会いました。本人に余命は知らされていなかったため、私は最初、何を話したらよいのか分からず、患者さんのところへ行くのが苦痛でした。でも、毎日接するうちに患者さんの優しさを感じ、できることを精一杯やりたいと思いました。本人はもう長くは生きられないことを感じていたのかもしれませんが口には出さず、苦痛なはずなのに、私が病室へ行くと必ずニコッと笑い、迎えてくれました。

ある朝、その日の早朝に亡くなったとの報告を受けました。顔を見たとき涙があふれました。家族の前で泣いてはいけないと思い、その場から離れてしまいましたが、指導者に「患者さんの最期を、逃げずにちゃんと見なさい。送り届けるまで看護の仕事は終わっていない」と言われ、泣きながら患者さんのもとへ戻りました。そして、人生最期のときに、多くのことを学ばせてもらった患者さんへ、感謝の気持ちや、病気と闘い続けたことへの“お疲れさま”の気持ちを伝えました。

人の死に直面し、看護の仕事は辛いと思いましたが、後日患者さんのご家族が「ありがとう、あなたがいてくれてよかった」と、病院に伝えに来てくれました。その言葉だけで十分でした。

看護師になり、さまざまな場面に出会うことがありますが、今は、患者さんの最期に関わり、手助けができる貴重な仕事だと思っています。

【問い合わせ】村立東海病院(☎282-2188)、福祉保険課地域医療担当(☎287-0899)